

高校球児における全国制覇を目指した生活とその後のライフスキルとの関係

～甲子園出場経験、メンバー・メンバー外に着目して～

*The Relation between Life in The High School Baseball Club
Aiming at National Championship and The Adult Life Skills
～Focusing on Members and Non-Members～*

スポーツクラブマネジメントコース

5016A317-6 森 士

研究指導教員：間野 義之 教授

1. はじめに

近年スポーツ界では、国内外に関わらず、現役または引退した選手による薬物使用や賭博等の社会性が問われる問題が散見される。友添(2016)によれば、運動部活動は世界に例を見ない我が国独自の日本型スポーツ教育システムであり、身体的発達のみならず、人間形成の上でも多大な影響を及ぼすと述べている。このように、学生時代に運動部活動、スポーツを通して得た経験は、その後の人生に影響を与えている可能性があることが考えられる。そのような中、WHO (1997)が「日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処する為に必要な能力」と定義しているライフスキルが、社会、教育現場等の様々な分野で注目されており、スポーツ、学校教育における運動部活動においても、その関係性について関心が高まっている。

2. 先行研究の検討

上野・中込(1998)は、部活動参加者は一般生徒よりも競技スキルと同種の内容を持つライフスキルを獲得していると示唆しており、様々なスポーツ現場でライフスキルプログラムの実践が行われている。しかしながら、運動部活動で目標に向けて過ごした集団生活と、その後のライフスキルとの関係についての研究は未だ見当たらない。そして、上野(2013)はイベントに向けて目標を設定し、体調管理及び、意思疎通を図った集団行動を行える運動部員の経験は、将来の困難にも上手く適応できると述べていることから、下記二つの仮説を立てることとした。

- ①学生スポーツ経験者のライフスキルは、一般青年・成人の平均と比べて高い。
- ②全員で高い目標に向かって活動しているチームの部員は、甲子園出場経験の有無や、

メンバー、メンバー外という属性別に分けてライフスキルを比較しても差は生じない。

3. 研究目的

高校球児における全国制覇を目指した生活と、その後のライフスキルとの関係を明らかにする。高校生活に注目し、嘉瀬ら(2016)の開発した青年・成人用ライフスキル尺度を用いて、野球部 OB・OG のライフスキル得点を、一般成人との比較や、野球部 OB・OG の中の甲子園出場経験の有無、メンバー・メンバー外の属性による比較を行う。また、高校生活から得られた経験や学び等を自由記述から明らかにする。

4. 研究方法

調査対象者

S 県 U 高校野球部の昭和 56 年度卒の 1 期生から平成 24 年度卒の 32 期生迄で社会人経験が有り、且つ現在のライフスタイルが高校時代から強く影響を受けているという者、250 名(対象サンプル)を対象とした。

調査方法

筆者が高校野球関係者であることを鑑み、研究に際しては第三者を介した調査を行うことで調査者によるバイアスの影響について対策を講じた上で、S 県 U 高校野球部 OB 会の Web サイトを通じてアンケート調査を実施した。

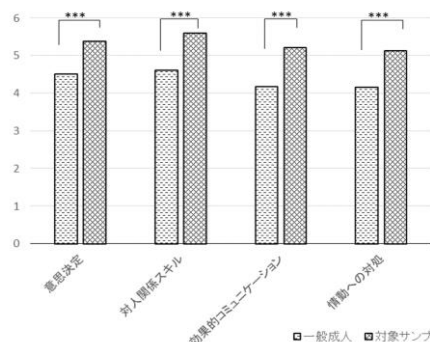
調査内容

- ①個人プロフィール調査
- ②青年・成人用ライフスキルの測定
- ③部活動経験から得られたものと失ったものに対する自由記述

5. 結果

4 因子全ての青年・成人用ライフスキルにおいて、対象サンプルが先行研究で示された一般成人群と比べ、有意水準 0.1%未満で有意に高い結果となった。(表 1)

(表1)尺度得点の平均値の差の比較



甲子園出場経験の有無、及びメンバー・メンバー外という属性別の平均値を独立したサンプル t 検定で比較したところ、全ての成人ライフスキル項目において有意差は得られなかった。(表2)

(表2)属性比較

甲子園出場経験	あり(n=78)	なし(n=172)	t	df
意思決定	44.06	n.s.	42.59	1.63 200.57
対人関係スキル	28.71	n.s.	27.67	1.77 201
効果的コミュニケーション	26.94	n.s.	25.73	1.86 179.61
情動への対処	15.62	n.s.	15.33	0.65 248

メンバー・メンバー外	あり(n=160)	なし(n=90)	t	df
意思決定	43.44	n.s.	42.36	1.03 147.31
対人関係スキル	28.27	n.s.	27.50	1.15 159.57
効果的コミュニケーション	26.48	n.s.	25.44	1.54 248
情動への対処	15.38	n.s.	15.48	0.22 248

自由記述に示された意見を学識経験者2名と議論し、甲子園メンバー、予選メンバー、3年間メンバー外の3属性による、共通、非共通の概念に注目し一覧表に纏めた。

6. 考察

一般成人群ライフスキル平均得点と U 高校野球部 OB・OG との関係について調べた結果、U 高校の方が全ての項目において高いという結果が出た。自由記述の中で一番の共通点として挙げられたのは、高校三年間の野球部活動をやり遂げた中で培った体力(身体的要素と精神的要素)に自信を持っているという傾向である。甲子園で全国制覇を目指すというイベントに向けての準備が体力(心身共に)に繋がり、自信を般化させることにより、間接的ではあるが、その後のライフスキルに生かされていると

少なからず解釈する事ができる。そして、もう一つの要因として、団体スポーツ特有の共有から来る成果と言えるのではないだろうか。チームが勝利を目指す上で、マネジメントを機能させるべく各自が役割を果たしていくことが重要となる。その面では、メンバー及び甲子園出場選手のプレーに対する成功体験もさることながら、「みる」「する」「ささえる」というスポーツを共有するという考え方から推察すると、イベントを通じて成功体験を共有していたという一面もあったのではないかと考える。

日頃から甲子園での全国制覇という高い目標を持ち、メンバー、メンバー外に関わらず、入学当初から最後の一分一秒までメンバーを目指すという覚悟と意識を持ち、最後まで諦めない精神を求め、それを達成できるための環境(ハード・ソフト両面)がそこには整っていたと考える。そして、個人のパフォーマンスを発揮するだけではなく、チームとしてのマネジメントを意識した上で組織作りをして来た証と考える。

7. 本研究の結論と限界

本研究において、野球部 OB・OG の成人ライフスキル得点の平均値は、一般成人群よりも高いことが示されたと共に、高校野球部時代の甲子園出場の有無や、メンバー・メンバー外といった属性間における有意差は得られないことが示された。尚、当時の高校生活と現在のライフスキルとの関係について、考察を通じて一部記述的に示す事ができた。つまり、集団行動における「効果的コミュニケーション」、「対人関係スキル」などに独特な特徴となって現れたことから、高校球児が全国制覇という高い目標を持つ野球部の一員として、仲間と共に三年間やり遂げた生活は、その後のライフスキルを高める可能性があることが示唆された。

研究の限界として、現在のライフスタイルは高校時代に一番影響を受けたと回答している者を対象サンプルとしたため、高校野球に対して肯定的な考えをもつ者の意見が強く反映された可能性は否定できない。また、あくまでケーススタディに留まっており、今後は他の甲子園出場経験を持つ学校や出場経験の無い学校との比較等の検証を行っていく必要があると考える。